

米国 自動車部門での生産削減による一時的な落ち込み(06年5月鉱工業生産)

発表日：06年6月15日(木)

～自動車を除く製造業は堅調持続～

第一生命経済研究所 経済調査部

桂畑 誠治(かつらはた せいじ)

(03-5221-5001 : seiiji@dlri.dai-ichi-life.co.jp)

鉱工業生産 (Industrial Production and Capacity Utilization)

	鉱工業生産		製造業 (NAICS)						設備稼働率	製造業 (NAICS)	生産能力
	前月比	前年同月比	製造業 (NAICS)	鉱業	公益	ハイテク 関連	除ハイテク 関連	自動車関連			
05/05	+0.2	(+2.4)	+0.4	▲0.7	▲0.2	+1.9	+0.3	+0.8	+79.8	+78.1	+0.1
05/06	+0.8	(+3.7)	+0.4	+0.9	+5.2	+1.0	+0.2	+2.4	+80.3	+78.2	+0.1
05/07	▲0.0	(+3.1)	+0.2	▲1.0	▲0.1	+2.2	+0.1	▲2.0	+80.2	+78.2	+0.1
05/08	+0.3	(+3.1)	+0.4	▲0.6	+0.3	+3.0	+0.2	+3.6	+80.3	+78.4	+0.1
05/09	▲1.3	(+2.0)	▲0.5	▲9.0	▲0.3	+1.6	▲0.5	+2.8	+79.1	+77.8	+0.1
05/10	+1.1	(+2.4)	+1.8	▲1.3	▲2.0	+1.0	+1.9	▲0.0	+79.9	+79.1	+0.1
05/11	+0.9	(+3.2)	+0.8	+4.5	▲1.0	+3.7	+0.4	▲4.6	+80.5	+79.6	+0.1
05/12	+1.0	(+3.5)	+0.4	+2.6	+4.2	+1.6	+0.4	▲1.3	+81.1	+79.7	+0.1
06/01	▲0.1	(+3.2)	+0.9	+2.3	▲10.0	+0.1	+0.9	+2.6	+80.9	+80.2	+0.2
06/02	+0.4	(+3.1)	▲0.2	+0.7	+5.7	+1.2	▲0.3	▲0.9	+81.1	+79.9	+0.2
06/03	+0.5	(+3.8)	+0.5	+0.4	+1.3	+0.9	+0.5	+1.5	+81.4	+80.1	+0.2
06/04	+0.8	(+4.7)	+0.7	+1.1	+0.9	+0.9	+0.7	▲0.2	+81.9	+80.5	+0.2
06/05	▲0.1	(+4.3)	▲0.1	▲0.2	+0.2	+0.9	▲0.4	▲1.3	+81.7	+80.3	+0.2

(出所) FRB

(注) 数字は前月比、但しカッコ内は前年同月比。

鉱工業生産は前月比 ▲0.1%と市場予想に 反し下落した

06年5月の鉱工業生産は前月比▲0.1%と、市場予想の同+0.2%に反し下落した。公益が鈍化し、鉱業、製造業がマイナスに転じた。もともと、基調を示す3ヵ月移動平均・3ヵ月前対比年率では+5.1%（前月+5.1%）と高い伸びを維持しており、生産は堅調を持続していると判断される。

製造業も、自動車、一般機械等の縮小により前月比▲0.1%とマイナスに転じた。しかしながら、3ヵ月移動平均・3ヵ月前対比年率では+4.5%（前月+4.4%）と高い伸びを維持しており、製造業は堅調さを保っていると考えられる。

稼働率は、生産能力が前月比+0.2%と拡大した一方、生産が同▲0.1%となったため81.7%と市場予想を下回った。他方、製造業の稼働率も80.3%と下落した。

拡大した製造業生産 は19業種中7業種 にとどまった

業種別では、鉱業は前月からの反動もあり、前月比▲0.2%とマイナスに転じた。公益は、天然ガスが同+2.3%と増加に転じたものの、電力が同▲0.2%となったため、全体でも同+0.2%と減速した。

製造業は、前月比▲0.1%とマイナスに転じた。拡大した業種数が19業種中7業種と4月の14業種から半減した。セクター別にみると、自動車関連の生産は、自動車部品が前月比▲0.5%とマイナスに転じ、完成車が同▲1.9%と減少ペースが加速したことから、同▲1.3%と減少幅が拡大した。

一方、ハイテク関連は、通信機器が同+2.0%に減速したものの、半導体が同+0.3%と増加に転じ、コンピューターが同+0.7%と高い伸びを維持したことにより同+0.9%と前月と同率の伸びとなった（前年同月比でも+19.6%と高い伸び）。基調を示す3ヵ

月移動平均・3ヵ月前対比年率では5月に+10.8%（前月同+11.3%）と2005年後半のような勢いはないが高い伸びを維持しており堅調さを保っている。

2006年7～9月期も 製造業生産の堅調が 見込まれる

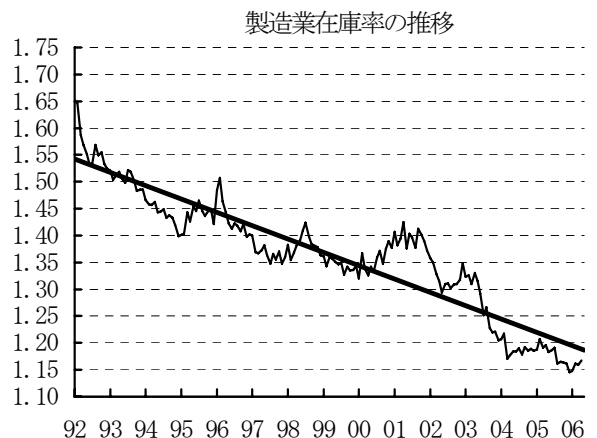
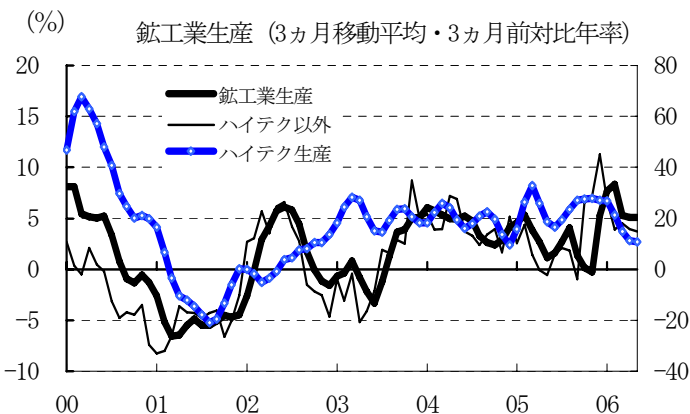
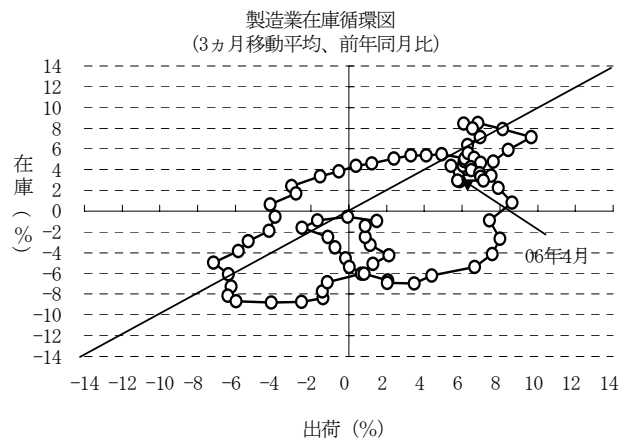
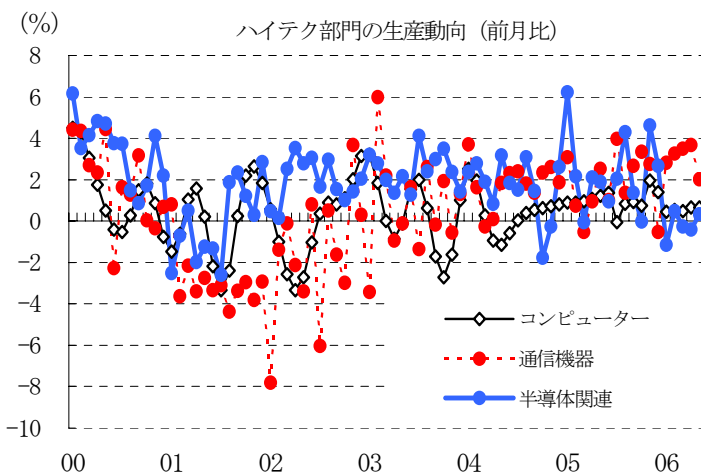
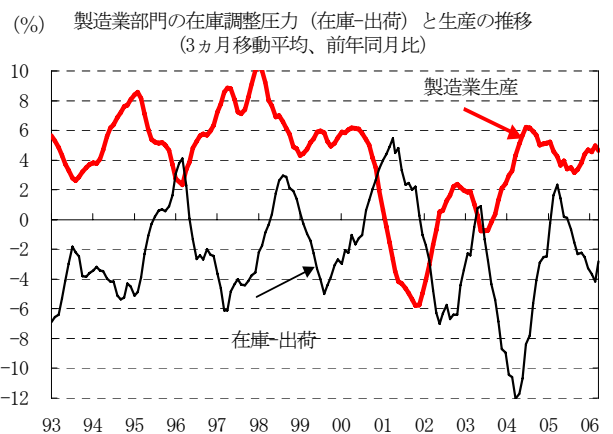
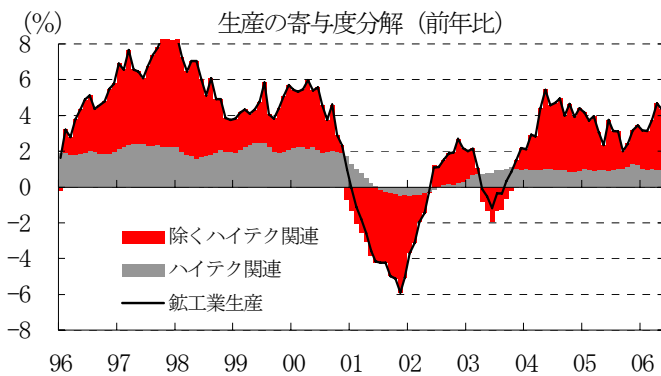
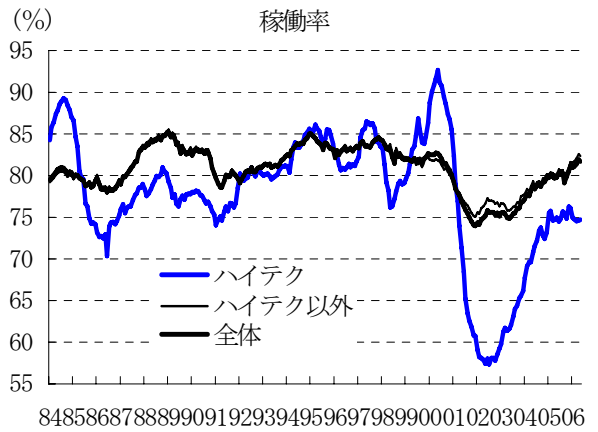
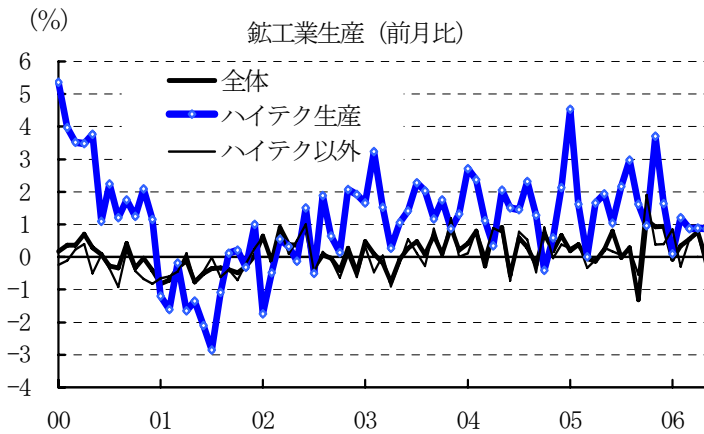
今後の需要動向では、4～6月期の個人消費は雇用・所得の増加が続くなか、住宅部門からの資金調達の拡大ペース鈍化やガソリン価格の上昇等により同+2%台に減速すると見込まれる。同期の住宅投資は、金利上昇等の影響で縮小すると予想される。7～9月期も上記のような動きが持続することで減速感が小幅強まるとみられる。

一方、設備投資は、堅調なペースでの成長持続によって期待収益率が高い水準を維持するもと、①コスト削減圧力の強まりによる効率化投資需要の高まり、②稼働率の上昇、③オフィスビル空室率の低下、④コンピューターの更新投資、⑤規制緩和に伴う通信業での光ファイバー投資の増加等によって投資需要は強い。また、資金調達面では、①キャッシュフローの増加、②株価の上昇、③信用スプレッドの縮小等投資を行い易い環境にあり、設備投資は年内堅調さを維持するとみられる。

このような最終需要に加えて、コスト削減圧力の継続を背景に4～6月期以降の在庫投資の拡大ペースは抑制的なスタンスが維持されると予想される。輸出は、年央にかけて海外景気の拡大ペース加速によって堅調さを維持すると見込まれるものの、年後半には海外景気の減速によって拡大ペースが鈍化すると予想される。

以上のことから、4～6月期の生産は堅調さを維持すると予想される。しかし、7～9月期には内需の鈍化に加えて、世界的な景気の減速を背景に、生産の拡大ペースは小幅鈍化する公算が大きい。





本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。